『現代の歴史総合　みる・読みとく・考える』

目　次

世界のつながり
2世紀の世界／8世紀の世界／13世紀の世界／16世紀の世界／18世紀の世界

歴史の扉
1　歴史と私たち　現代の私たちと旅
2　歴史の特質と資料　歴史資料とは何だろうか

第Ⅰ部　近代化と私たち
❶交通と貿易／❷産業と人口／❸権利意識と政治参加、国民の義務／❹学校教育／❺労働と家族／❻移民

第1章　結びつく世界と日本の開国
1　18世紀の東アジアにおける社会と経済
2　貿易が結んだ世界と日本
3　産業革命
4　中国の開港と日本の開国

第2章　国民国家と明治維新
1　市民革命
2　国民国家とナショナリズム
3　明治維新
4　日本の産業革命
5　帝国主義
6　変容する東アジアの国際秩序
7　日露戦争と東アジアの変動
●近代化と現代的な諸課題
❶開発・保全　❷対立・協調　❸自由・制限

第Ⅱ部　国際秩序の変化や大衆化と私たち
❶20世紀の国際関係の緊密化／❷アメリカ合衆国とソヴィエト連邦の台頭／❸植民地の独立／❹大衆の政治的・経済的・社会的地位の変化／❺生活様式の変化

第3章　総力戦と社会運動
1　第一次世界大戦の展開
2　ソヴィエト連邦の成立とアメリカ合衆国の台頭
3　ヴェルサイユ体制とワシントン体制
4　世界経済の変容と日本
5　アジアのナショナリズム
6　大衆の政治参加
7　消費社会と大衆文化

第4章　経済危機と第二次世界大戦
1　世界恐慌の時代
2　ファシズムの伸長と共産主義
3　日中戦争への道
4　第二次世界大戦の展開
5　第二次世界大戦下の社会
6　国際連合と国際経済体制
7　占領と戦後改革
8　冷戦の始まりと東アジア諸国の動向
9　日本の独立と日米安全保障条約
●国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題
❶対立・協調　❷統合・分化　❸平等・格差

第Ⅲ部　グローバル化と私たち
❶冷戦と国際関係／❷人と資本の移動／❸高度情報通信／❹食料と人口／❺資源・エネルギーと地球環境／❻感染症／❼多様な人々の共存

第5章　冷戦と世界経済
1　冷戦下の地域紛争と脱植民地化
2　東西両陣営の動向と1960年代の社会
3　軍拡競争から緊張緩和へ
4　地域連携の形成と展開
5　計画経済とその波及
6　日本の高度経済成長
7　アジアのなかの戦後日本

第6章　世界秩序の変容と日本
1　石油危機
2　アジア諸地域の経済発展
3　市場開放と経済の自由化
4　情報技術革命とグローバリゼーション
5　冷戦の終結とソ連の崩壊
6　現代の東アジア
7　東南アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民主化
8　地域統合の拡大と変容
9　地域紛争と国際社会
10　現代と私たち
●現代的な諸課題の形成と展望

〈特徴紹介〉

藤本 和哉

新科目・歴史総合では内容面(日本史と世界史を融合した近現代史)だけでなく、学習方法の面でも新しさが打ち出されている。おもなものとして「見方・考え方にもとづく学習」と「資料を活用し、歴史の学び方を習得する学習」があげられるが、前者の充実には適切な主題(テーマ)と問いが、後者の実現には豊富な資料がそれぞれ不可欠である。これらに対応した本書の特徴を紹介したい。

高校生にとって学びやすいテーマを設定

本書では、歴史総合の目標を強く意識し、「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」「グローバル化」について、日本と世界を相互的にとらえられるテーマを設定した。1テーマが1つの節をなしており、おおむね時系列に沿って配置してあるので、前から順に学習していけば、歴史の大きな流れをつかめるようになっている。

授業でそのまま使える問いを各所で明示

本書の数多くの問いは次の3種にわけられる。

(1)テーマ全体の問い　各節の冒頭にテーマ全体を貫く問いが設けてあり、学習の方向性がつかみやすくなっている。

(2)テーマへのアプローチ　各節最初のページでは、その節を通して理解して欲しいことや考察して欲しいことを3つの問いで示している。ねらいが明確になるので、教員・生徒とも学習が進めやすくなるだろう。たとえば第1章3節では「産業革命は、なぜイギリスで始まったのだろうか。」「産業革命は世界の結びつきをどのように強めたのだろうか。」「産業革命によって人々は豊かになったのだろうか。それとも貧しくなったのだろうか。」の3つを示している。最後の問いのように、簡単には答えられないものもあるが、大半は本文や資料にヒントが示されている。まず「アプローチ」で学習の見通しを立ててもいいし(その段階で問いに答える必要はない)、最後に「アプローチ」に答えることで節の学習のまとめをおこなうという使い方もできる。

(3)資料に付した問い　全編を通じて多くの資料が掲載されており、そのほとんどに問いが設けられている。読み取るだけの問いから複数の資料を比較して考察する問いまで、内容も難易度も様々である。これらに取り組めば、読解力や資料を活用する力が育めるだろう。もちろん、すべての問いを授業で取り上げる必要はなく、生徒の状況や時間的制約に応じて選択すればよい。

多種多様な資料を豊富に掲載

本書はテーマに沿った簡潔な記述となっていて、本文を読むだけで概要を理解できるようになっている。そこからさらに理解を深めたり、見方・考え方を働かせる学習を展開したりするために、豊富な資料を掲載している。本文との対照を明示してあるので、使う場面はわかりやすい。文字資料だけでなく、風刺画や写真などの図版、表やグラフなど多様な種類について、定番のものから、これまでの教科書や資料集では取り上げられていないものまで幅広く掲載してあるので、歴史の授業に慣れていない教員には使いやすく、ベテラン教員にも新鮮なものになっているだろう。節の最初のページには、授業の導入に最適な図版を中心とする資料を複数用意したので、生徒の状況に応じて資料(および問い)を選び、提示することで興味・関心を高めることができる。

以上のような特徴をもつ本書の「テーマ」「問い」「資料」をそのまま活用することで、これからの高校現場で期待される「歴史的な見方・考え方にもとづく学習」が展開できるだろう。

(ふじもと・かずや／筑波大学附属高等学校教諭)

問いで深める・問いを深める歴史総合 ――『現代の歴史総合』を用いて

島津 聡

本稿では、『現代の歴史総合』を活用した「問い」を基軸とする授業について構想したい。

歴史総合をめぐっては世界史・日本史の融合という面が注目されることが多いが、学習指導要領（平成30年告示）で「社会的な事象の歴史的な見方・考え方」を身につける科目であることが強調されていることはいっそう重要である。

小・中・高を貫く「社会的な見方・考え方」のうち、歴史領域の見方・考え方は「社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたり」（学習指導要領解説）して課題を追及する方法とされており、「歴史総合」ではさらに、「近代化」「大衆化」「グローバル化」といった概念を利用した社会的特質の理解や構想が求められている。

それでは、どのような授業が展開されるべきであろうか。筆者は学習指導要領解説が、見通しや振り返り、対話、生徒が考える場面と教師が教える場面を組み合わせることを重要としているように、知識の習得や活用・再構成といった過程を段階的に設定することで、生徒自身が思考の深まりを実感する工夫が大切であると考えている。このようにみると、教科書は、歴史的な見方・考え方を働かせる素材と思考の道筋を提示するものとし、生徒みずからが問いにもとづいて探索するためのフィールドとして位置付けると良いのではないだろうか。

そこで、本稿では次の４つの視点で授業構想のあり方を提案する。

①問いを段階的・構造的に設定することで主体的・対話的で深い学びの実現をはかる。

②教科書を、生徒が問いにもとづいて、歴史的な見方・考え方を働かせ、探索する場として位置づける。

③学習の結果、習得した知識や歴史的な見方・考え方を生かして問いを表現できるようする。

④みずから歴史的な見方・考え方を働かせることができる学習者を育てる。

具体的な手立てとして、複数の単元を通底する問いのうえに、主題や資料活用のための問いを重層的に設定する。問いで内容理解を深めるとともに、歴史的な見方・考え方を生かしたより高度な問いを生み出すことで、新たな学びへと発展させる学習をめざしたい。

『現代の歴史総合』を活用した授業デザイン

『現代の歴史総合』は図版やグラフ等のバリエーションが豊富だ。資料をみる（観察する）、読み解く（読解し、情報を抽出する）、考える（比較・考察し意味付けする）機会を充実させる助けとなる。

様々な問いが設定されていることも特徴的だ。これらの問いは、単元の基軸として内容理解をうながす問いと考察の問い、資料活用の問いに大別できる。これらの問いは羅列的に扱われるべきではなく、授業者の目的や目標に応じて構造的・段階的に示されることが重要だ（**図１**）。**表１**では、『現代の歴史総合』の構成に従い問いの類型の一部と、想定される学習活動を整理した。

歴史総合では「ア 推移や展開を考察するための問い」と「イ 事象を比較し関連付けるための問い」

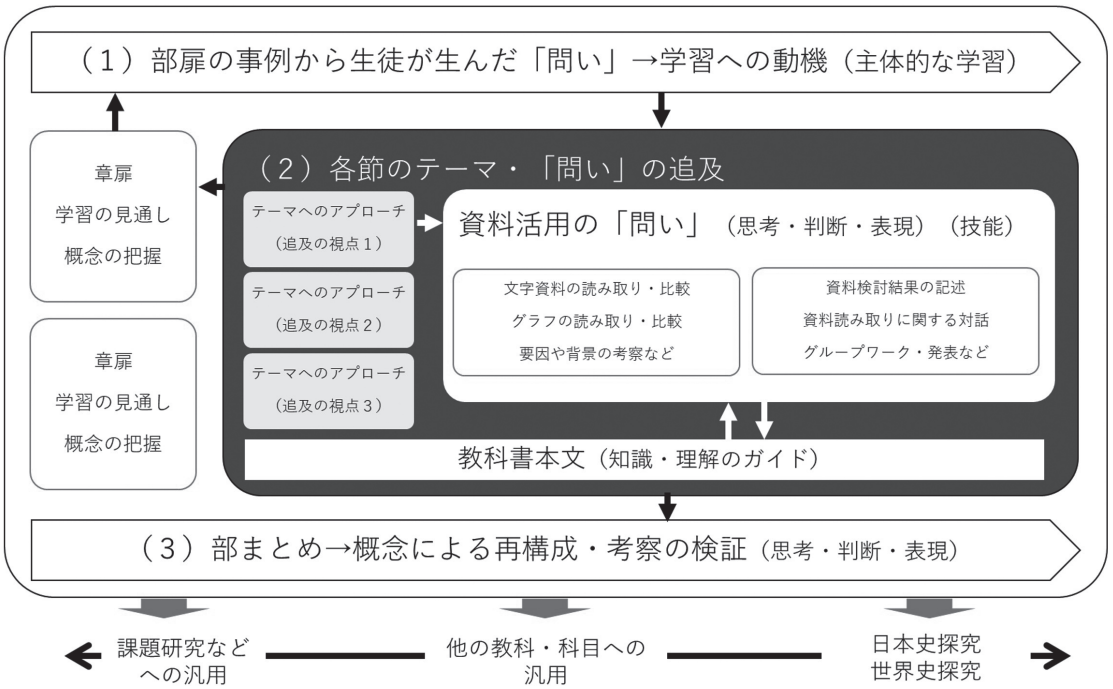

図1　『現代の歴史総合』における問いの構造図

A 単元の問い例		「問い」に対応する学習活動	学習のまとめとして想定される活動
ア推移・展開の問い	なぜ～だろうか	原因・時期などの追及	調査・議論の結果を表現したり、生徒同士で説明しあう
	どのように～だろうか	推移・影響などの理解	内容理解の結果を、推移・特徴を中心に説明しあうなど
	どのような人が～だろうか	原因・時期などを人々の属性を整理しながら追及	調査・議論の結果を表現、階層などに注目しながら関係を図で表現するなど
	いつ～したのだろうか	時期や画期、きっかけなどの追及	調査の結果を対話や議論
	いかに～したのだろうか	影響や結果をもとに程度を評価	考察の結果を議論し多様な評価と理由付けのあり方を理解する活動
イ比較・関連付けの問い	～の成果と課題はどこにあったのだろうか	前時代の課題と結果の比較、のちの歴史展開に関わる課題の発見 比較・検討の結果を表や図に整理する	発表や討論など考察の結果を議論し、多様な評価と論理的説明
	～について、もっとも重要なことは何だと考えるか	歴史評価・根拠の選択・発表資料の作成 論述・現代とのつながり	発表や討論など考察の結果を議論し、多様な評価と論理的説明
	～にはどのような意味があったのだろうか	前時代の課題と結果の比較、のちの歴史展開に関わる課題の発見	発表や討論など考察の結果を議論し、多様な評価と論理的説明
B 資料の問い例		「問い」に対応する学習活動	学習のまとめとして想定される活動
共通点や相違点はなにか		複数資料やデータの比較・整理・図示	表の作成・考察の結果の記述　生徒同士で考察結果を共有
どのような動機（理由）か		時代・人・国・集団の属性や背景の追及	考察の結果の記述　生徒同士で考察結果を共有
特徴は何か		資料（絵・文字・統計・グラフ）の読みとり	考察の結果の記述　生徒同士で考察結果を共有
もっとも～なのは何か（なぜか）		資料（統計・グラフ）の読みとり	評価の理由付けの発表・共有　適切な評価の選択
何を主張しているのか		資料（絵・文字）の読みとり・人物の属性や社会背景の検討	読みとり結果の記述・共有　適切な読みとりの選択
どのような意味か		資料にもとづく類推・考察・意味付け	類推の根拠を本文や他の資料からあげる

表1　問いの構造と学習活動の整理

を段階的に設定することが求められている。

問いを中心にラフを描くと、年間の指導は（１）部の問いの表現・章の概観→（２）各節の学習・章のまとめ→（３）部の振り返り・社会概念を用いた再構成・問いの答えの考察といった展開となり、（２）はさらに【A-ア】→内容理解（資料活用【B】）→【A-イ】→（資料活用【B】）となる。

「明治維新」の授業構想

第Ⅰ部第２章３節「明治維新」を主題に授業案を構想してみたい。学習指導要領にのっとり、立憲国家と国民国家の概念をもとに「明治維新」の展開・推移を考察し、ほかの事例と比較しながら共通点と相違点を探ることをめざした授業を展開する。

（１）第Ⅰ部　単元を貫く問いを表現する

第Ⅰ部「近代化への問い」では、「３　権利意識と政治参加、国民の義務」を取り上げ、「問い」の表現をうながす。1 2のアメリカの印紙法反対運動、3 4のフランスの球技場の誓い、5の『学問のすゝめ』を活用し、権利意識と政治参加、身分制と国民の関係、国家と国民の関係、権利と義務の関係が論じられていることに気付き、その関係に着目した問いが設定されると良い。

（２）「明治維新」を題材とした授業展開

２時間を配当し、「明治維新」を扱う。１時間目は明治維新の推移の理解、２時間目は多面的理解を目標とする。生徒はここまでにp.42Bの問いの考察の結果やp.45～46の学習を通じて市民革命や国民統合、国民国家の概念を修得していることが前提となる。

１時間目

①導入

１時間目は推移・展開の理解を目標とする知識習得パートとして位置付ける。**表１**の【A-ア】の問いとして節の主題を提示したあと、導入図版に注目させよう。p.48 1の図版で言い争っているのは、大名の山内容堂と公家の岩倉具視であり、天皇の姿もみえる。江戸時代の日本における身分集団と分権的な支配を確認しながら、両者の主張の共通点と相違点に関心を向けさせると良いだろう。

次に 2 では、イギリスの新聞から世界の目を意識させたい。『Times』は、日本のどのような変化を評価したのだろうか。「皇帝の約束」の内容に世論と国民の政治参加が含まれることに注目させ、この間に日本で議会制が採用されたことを生徒に気付かせる。次に年表を活用して、1 と 2 の間に20年の開きがあることに気付かせながら、主題である「国民の政治参加」を主題として提示していく。年表中の廃藩置県や徴兵令、地租改正などを利用して中学校までの既習事項を想起させ、主題との関連への関心を高めても良い。

ここで、「テーマへのアプローチ」を提示し単元全体の構造を示す。

②展開

アプローチ１・アプローチ２を中心に資料の問いに着目させる。

3 の家茂上洛図からは将軍と朝廷の政治的地位の変化に気付かせたい。

次に 4 から四国艦隊下関砲撃事件を奇兵隊がどのように受け止めたかを考察する。この時、キャプションから奇兵隊が藩主に上書を提出するに至った意義に気付くことができれば、前時までの学習の成果が発揮された証左と言えよう。

この間に薩長や幕府がそれぞれ国家構想を描き、統一国家のあり方を模索した点で共通していること、政権における徳川氏の位置付けに差異があることに気付くことで 1 の問いの答えにせまることができる。

次に、政治参加を求める担い手の広がりに注目しながら、7 の五箇条の誓文の意義を考察していく。年表作成をおこなって知識を整理するなどの作業を設定すると良い。p.52の本文では、運動の担い手が士族から豪農などにも広がっていくこ

とが扱われているが、「彼らが政治参加を主張するのはなぜだろう」など、教員から補助となる問いを示して、五箇条の誓文と自由民権運動の拡大との関連に気付かせても良い。

③まとめ

アプローチ１と２についての考察結果をワークシートやノートに記述する。クロストーク活動をおこなって、優れた解答を共有すると良いだろう。

２時間目

①導入

２時間目は「比較」の視点を使って考察する。**表１**の【A-イ】の問いとしてアプローチ３を提示し、比較・関連付けの問いに関する学習活動に入る。知識構成型ジグソー法を活用した協働学習により、対話的学びによる知識の再構成をめざしたい。

②展開

エキスパートチームを(A)資料1 2担当、(B)資料14 15担当、(C)資料18～21担当に構成する。それぞれ(A)は欧米の市民革命との経緯面の比較、(B)は憲法や国家体制の比較、(C)は国民統合のあり方の考察を念頭においたものである。

生徒には第Ⅰ部第２章１節「市民革命」、２節「国民国家とナショナリズム」の学習を振り返り、その特徴と比較の視点を用いて取り組むようにうながす。エキスパートチームでの考察の結果は、ワークシートやノートに記録させ、ジグソー活動での説明ができるように準備させる。

次に(A)(B)(C)それぞれ１人ずつ３名１チームのジグソー活動チームを構成し、順番にエキスパート活動の結果を「比較」の視点から発表し、アプローチ３の「可能性と限界」を考察する。日本が立憲国家となるうえで、その動きがどのような主体によって推進され、その結果はどのようなものであったのか、大日本帝国憲法体制の成果と課題はどこにあったのか、国民国家として国民を均質化するうえで、日本ではどのような取り組みがおこなわれ、その課題はどこにあったのかといった論点に気付くようううながしたい。

③まとめ

考察結果を発表する時間を設け、最後に、節の主題について各個人で論述する。こうして、１時間目の推移・展開パートと２時間目の比較パートを関連付け、統合した理解をうながす。

（３）Ⅰ部まとめ　概念を用いて再構成する

部のまとめとして①開発・保全、②対立・協調、③自由・制限といった近代化に関わる概念を用いて学習内容を振り返る。明治維新の展開に注目し、対立・協調それぞれの具体事例を抽出して表に整理したり、それぞれの主張の担い手や背景について考察し、論述や根拠を持ち寄って討論をおこなったりする活動が想定できる。この時、アジア歴史資料センターなどのWebサイトを活用して歴史資料を検索するのも面白いだろう。

おわりに

歴史総合における成果は日本史探究・世界史探究や、総合的な探究の時間における課題研究の場面で検証されることになるだろう。だが、それにとどまらず、生徒が将来にわたって社会課題を歴史的に問い、分析し、行動・選択することができることがめざされる。

歴史総合における問いは内容理解の導入や学習課題の提示手段としてだけではなく、歴史を自分事にするとともに一連の学習の結果として、より深く、生み出され続けるものなのではないだろうか。『現代の歴史総合』が生徒にとっても教員にとっても、そうした学びのフィールドとして活用されることを願う。

（しまつ・さとし／東京都立八王子東高等学校教諭）